

2014年度

北海道の労働と福祉を考える会

総会資料

目次

はじめに—そのうちこれを読む人へ 1

報告事項

今年度の活動概要 2

会員数の変化について 3

夜回り 6

炊き出し 7

生活保護同伴活動 9

フォローアップ 10

概数調査 12

支援者相談 15

来年度へむけて 17

2014 年度決算報告 17

審議事項

予算案（収入） 18

予算案（支出） 18

反貧困ネットワークへの加盟について 20

会計年度の変更について 20

2015 年度活動計画案 20

役員体制 20

私と労福会 21

はじめに—そのうちこれを読む人へ

残るのは、手で触れられるものだけだろう。宙に浮いた目標や、活動、激しく交わされた議論も、大半は忘れられる。もちろんそれは望ましいことではない。しかし、継続することも、記憶することも、個々人の意志と情熱にだけ任されているうちは儂いのだ。人間への過信は慎まなければならない。本当に残したい考えは、手で触れられるものとして、いつも使う道具の中に、いわば環境に、埋め込まれなければならない。

今年度、労福会に埋め込んだものは主にふたつある。ひとつは新人パック（仮称）だ。新しく夜回りに来た人に、クリアファイルに詰めた書類の束を渡している。もうひとつはフォローアップ記録表で、こちらはまだ定着していないが、もう少し時間をかければ上手くいくのではないかと思う。

新人パック（仮称）の内容は、以前からあった夜回りの際の注意事項と、いくつかのタームに関する解説（生存権規定、生活保護、勤医協、ペットサダ、などなど）、そして入会申込書だ。解説は、新しく来た人が、知らない単語が多すぎて疎外感を感じてしまうという話を聞いて作ったものだ。誤りや改善の余地を見つけては、随時更新されている（上田事務局次長によって）。入会申込書は重要だ。これまで、入会の際に提出する書類というのはなかった。いまさら設置した目的は、入会の段取りの不明瞭さが、兼ねてから問題になっている会員の範囲の曖昧さに繋がっているのではないか、ひいては定着率の低さに影響しているのではないかと考えられたからである。この仕組みの導入によって、会員の範囲の問題が完全に解決されたというわけではない。しかし、形は多少変わるだろう。今後は頑張る、ちゃんとする、などといった意志の問題ではなく、申込書の形式や提出先の限定など、制度のレベルでの議論がより分かりやすく開かれるのだ。また、定着率については、申込書の影響と考えるのはあまりに浅はかだが、微増しているのは事実である。さらに、事務局長を務めた実感として、新規の会員たちからは、組織に入ったことによって本来生じるべき責任感があるように思える。これはかなり画期的な変化といえる。

フォローアップ記録表についても簡単に書いておきたい。当事者の名前が並び、その横に最終面談日を記録していくだけ、という簡単な道具である。フォローアップは不要と判断されれば名前が消され、新たに必要な人が現れれば追加される。各人がそれぞれ同一のものを一枚ずつ管理し、毎月の会議で更新・同期していく。情報を同じ空間で共有する作業が必然的に課されることが重要で、フォローアップに漏れがあれば誰かが気づくし、ついでに事例の報告もできるという寸法だ。支援者が困難を抱えていることがわかれば、検討会を開く流れも考えやすい。更新・同期作業自体は簡単だ。負担も軽く、十分継続できる。慣れれば、いつもの夜回りのように当たり前のものになるだろう。そして、その簡単な作業は、より重くて困難な、フォローアップ活動の継続を可能にする装置として機能するのだ。

コタツから出られないという人がいる。出るには気力が必要だ。だから、僕は先にスイッチを切るようにしている。するとコタツは冷えてゆき、終にはコタツで寝ている方が寒くなる。意識ではなく、環境を変えることだ。新しい道具を作ることだ。もちろんそれは簡単ではない。道具は使われなければ意味がないが、使われるためには、使い勝手と手触りがよいものでなければならないからだ。

以上のように考えて、ここ2年間、僕はたくさん残骸を生み出してきた。今年度の人には周知のことだろう。けれど馬鹿にしないでほしい。基本路線は間違っていないと思うのだ。だから、嫌じゃなければ、今後の参考にしてほしい。ごく一部ではあるけれど、この資料には悪戦苦闘の痕跡が残っているから。

事務局長 小川 遼

今年度の活動概要

4月7日	新入生オリエンテーリングで宣伝
4月14日	文系合同説明会
4月19日	合同説明会
4月26日	臨時総会
5月9日	札幌国際大学にて活動紹介
5月18日	お花見会
5月30日	北大ボラカフェで説明会
5月31日	炊き出し（天使の食事会）
8月30日	レオン見学
8月31日	概数調査
10月1日	会報30号発行
10月4日	炊き出し 司法書士会共催
10月19日	「秘密保護法退治フェス」出店 寄付募る
11月21日	「北のチカラ！ 子どもの貧困対策 どさんこ緊急決起集会」に参加
12月7日	劇団ども 活動紹介
1月18日	概数調査
2月7日	炊き出し 司法書士会共催
2月28日	会報31号発行
3月14日	星園プラザへ引っ越し
3月10日	ウィメンズユニオン・女のスペースおん 見学
3月28日	3月28日 総会

会員数の変化について

今年度は会員に関わることで2つの大きな変更がありました。

1. 会員の定義

会では「会の事務局員、会員、非会員の境界線があいまいで・・・非会員の発言が企画に影響を与える」（2000年度総会資料 16p）という問題が設立の当初から指摘され、これまでその問題が何度か提起され議論されてもきましたがこの14年間一度も結論を導き出すことができずにきました。今期は議論に相当の時間を費やして会員の定義を明確にし、それを規約の細則として定めてようやく区切りをつけることができました。その内容は「会員は会費納入の義務を負い、会は会員によって運営される」ということを明文化した（規約細則参照）に過ぎないのですが、このような自明なことを確認するのに多年を要したということです。なお、未加入の人たちの夜回りや炊き出しなどの活動への参加は、これまでと変わりなく自由となっています。

2. 会の運営主体

いまひとつの変更は会の団体規定である。これまで会は「労福会は学生を主体とする団体である」とホームページなどでアナウンスしてきました。その意味するところは「会は学生を中心に運営される団体」としておりました。（2005年総会資料 40p）今期それを「労福会は学生・社会人による野宿者支援団体」に改めました。

会の成り立ちには北海道大学でのゼミが発端でしたので、初期は学生を中心に運営されていました。しかし、遅れてきた社会人が増えて行くに従って「学生の団体であって学生団体でないような会の性格に何度も矛盾を感じ窮屈を覚えた」という類の声が聞こえるようになり、学生と社会人との間に隔たりが生じてまいりました。

そもそもボランティア組織というものは、学生とか社会人の区別なく構成員はすべて平等であることを最低限の了解事項とします。組織は人によって成り立ちますから、この平等の原則が貫徹されませんと円滑に運営されなくなってまいります。会員減少問題の討論のなかで、従前の団体規定は社会人を疎外したものになっていて構成員間の意思疎通を妨げる作用をもたらしているのではないかということが提起され、このたびの変更となりました。会の構成員は仕事や学びの場が異なるうえに世代も異なるため、人間関係の絆を形成していくことがそもそも困難なところがあります。しかし、その異質性をうまく取り込み統合できるならば組織発展の大きな原動力となる可能性をも秘めているものです。団体規定を改定したからといって学生と社会人の問題が解消し異世代間の交流が深まるということではまったくありません。「仏作って魂入れず」ということにならないように、会員の自覚的な取り組みとともにマネジメントも考慮されていかなければならないでしょう。

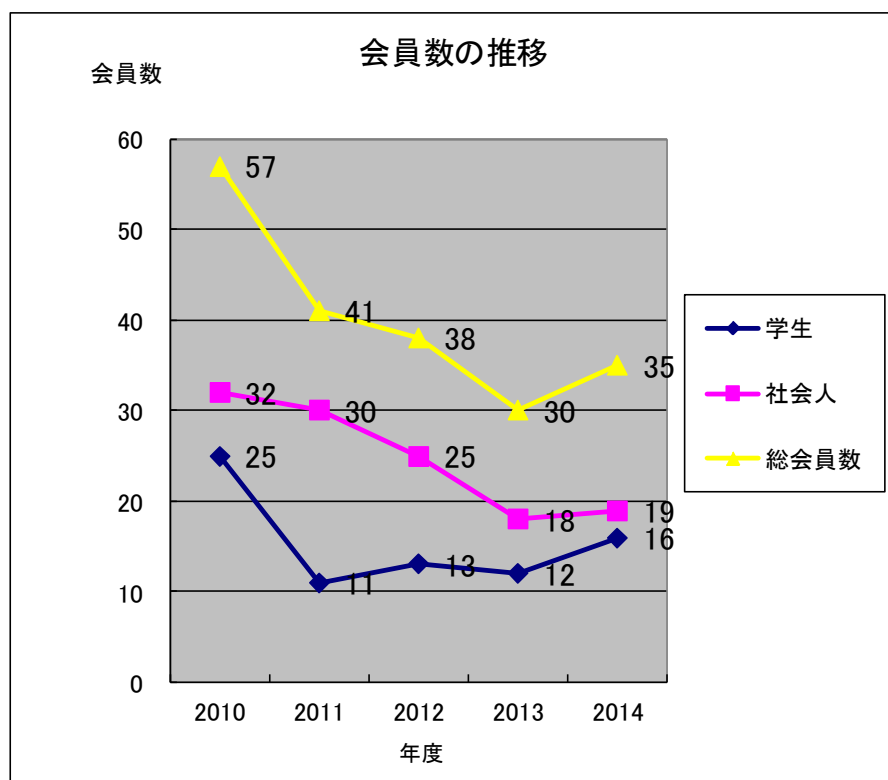
3. 会員数の推移

これまで会員数の減少が叫ばれておりながら、かつてその数字が一度も明らかにされてきませんでしたが今期は次のとおり表しました。今年度学生会員は4名増加し、社会人は1名の増員となっております。よって総計では5名の仲間が増えました。

今期学生会員のうち2名が卒業して社会人会員に移行したため学生の増員数はそれほど大きく表現されていませんが、新規加入と退会した人の差は6名と実質は大きな増員になっております。これは事務局の努力の賜と言えます。

区分	2013年	増加		減少		2014年
		新規加入	学生から	退会	社会人へ	
学生	12	9		3	2	16
社会人	18	4	2	5		19
総計	30	12	2	8	2	35

会員数が公表されておられませんでしたので、会員数の推移から組織の現況を俯瞰するために近年のそれを下図のとおりグラフにいたしました。なお、2010年の会員数は決算書の会費納付額から逆算した推定値になっております。



会員の総数は上図のとおり右肩下がりに減少して、昨年は10年度比53%までになりましたが今期のそれは61%と少し回復いたしました。学生会員は2011年に前年の半数（前年比44%）まで急減していますが、これは2代目会長（北星学園大学教官）が退会した際に同大の多くの学生も離れたためです。それ以降低迷が続いておりましたが、今期は10年度比64%まで回復いたしました。社会人会員はグラフのとおり毎年減少しつづけていましたが、今期は若干持ち直しの傾向がみられます（10年度比59%）。この社会人会員の減少傾向の検討のなかから前述した組織のあり様の改定へ展開していきました。減少の事由を特定はできませんが、会員として存在している価値を見出し得なくなっているものとみてよいでしょう。

上記から学生会員は低迷状態から社会人会員は減少傾向からともに反転上昇を示したというのが今期

の特長となります。

人間と同じように組織にも成長段階があって、設立趣旨に共鳴した人たちが加入し活動に勢いのある発展期、活動の内容が定着し一定の成果を挙げていく安定期、そして活動に勢いが見られなくなり、活動内容や組織のあり様など内在している問題に見直しが迫られる変革期があります。変革が成し遂げられると組織はまた新たな発展期を迎えます。いま会はこの変革期にあたり、その踊り場に差し掛かっていると見てよいのではないのでしょうか。今期会は前述の組織のあり様を見直し、フォローアップ事業の推進に力を注いで参りました。これらは変革の兆しと見ることができます。それを結実させるのはこれからの自覚的な活動によるでしょう。

井上敬一

夜回り

夜回りは労福会の中心的な事業である。今年度から変更したことは以下の2点。

- ①夜回り表を利用した記録の管理
- ②薬の持ち運びは基本的にしない

①の夜回り表については、今年度の初めから実施している。これまではノートに記載していたが、記入者によって書く内容が異なっていたため、書式を統一して必要な内容を後から振り返ることができるようにした。夜回り表はコース別にファイリングして、事務所に置いてある。

②の薬の持ち運びに関して、一時期は各班に医薬品を入れた袋を渡して、夜回り中に薬を欲しがる人がいれば、即座に渡せるようにしていた。だが、薬には市販のものとはいえ副作用の危険性があり、当事者の既往症も把握していないため、やはり薬を渡すのは危険であるという問題提起がなされ、会議で検討した結果、できるだけ薬は渡さないようにすることを決定した。そのため現在は、薬等はブースに置いておくようにし、体調不良者には勤医協の無料・低額診療制度を利用するように勧め、どうしても薬などが必要な場合は夜回り後に持っていく、という対応がなされている。

(上田文和)

(参考資料 夜回りで出会った野宿者の数(月初めのみ記載))

日付	札幌駅	大通	狸小路・すすきの	合計
2014/4/5	10	9	3	22
5/3	9	14	9	32
6/7	8	7	7	22
7/5	10	9	3	22
8/2	8	8	8	24
9/6	6	10	10	26
10/11	11	12	6	29
11/1	8	10	6	26
12/6	9	5	4	18
2015/1/3	8	14	6	28
2/14	13	5	11	29
3/7	11	9	4	24
平均	9.25	9.3	6.4	25.1

炊き出し

当会では、今年度、司法書士会との共催で法律相談会(2回)を兼ねた、炊き出し相談会を行っています。来場者に単に暖かい場所や食事を提供するだけでなく、スタッフと信頼関係を築き、自立への可能性を探る手伝いをするを目的として行われています。

今年度行われた3回の炊き出しの概要は、表のとおりです。

表：2014年度 炊き出し実施概要

回	日付	内 容	会 場	来場者数	特記事項
1	5/31	食事・生活物資の提供、散髪、モノマネライブ	エルプラザ	42	
2	10/4	食事・生活物資の提供、散髪、ミニコンサート、法律クイズ、法律相談	中央区民センター	37	司法書士会と共催 法律相談3件
3	2/7	食事・生活物資の提供、散髪、法律クイズ、法律相談	市民センター	33	司法書士会と共催 法律相談3件

1. 各回開催概要

①第1回 5月31日(土)

エルプラザで開催。前年同様、天使大学料理サークル「たべてる」に献立を依頼し、自分たちの手で調理しました。ホームレスの方々の栄養面も考慮し、栄養面のバランスも取れた献立で、ご飯が少なかった以外は好評でした。お笑い芸人の三浦健一さんにお越しいただき、モノマネライブを開催しました。来場者の方たちには好評でした。

②第2回 10月4日(土)

札幌市中央区民センターで開催。おにぎりや豚汁をふるまいました。昨年度行うことができなかったコーラスの皆様によるミニコンサート、司法書士会との共催で法律クイズ、法律相談を行いました。

③第3回 2月7日(土)

札幌市民センターで開催。お弁当の提供と、前回と同様、司法書士会との共催で法律クイズ、法律相談を行いました。北星短大より5名、ほっとらんどより4名の参加がありました。第3回は、時間が押すこともなく、予定どおりに開催することができました。

各回共に、希望者の皆様には生活物資の提供、散髪も折川さん、竹村さんのご好意により実施しています。

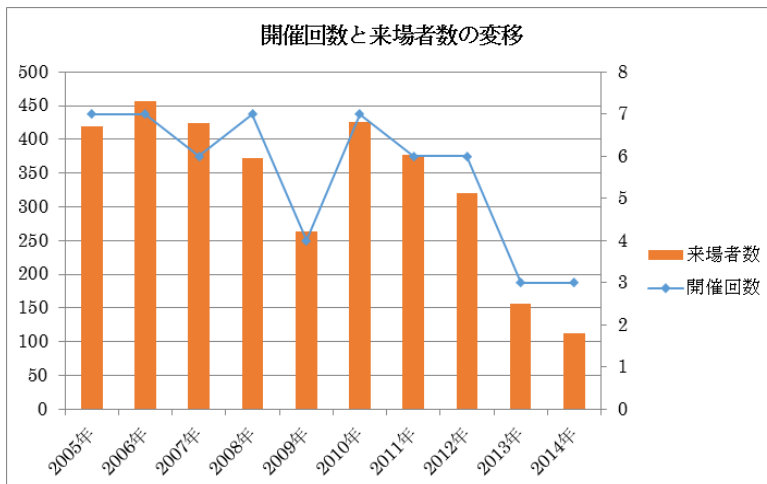
2. 今後の「炊き出し支援活動」の課題

前年度より開催回数が3回となり、参加者数が減少しました。今年度も同じ3回ですが、参加者数はさらに減少しています(表：開催数と来場者数の変移)。

(注：2012年の来場者数は1回不明となっているため、2012年の1回あたりの平均来場者数を加算してあります)

このような現状の中で、今後考えていかなければならない課題があると思われます。参加者数の減少

は、札幌市全体の野宿者数の減少なのか、PR 不足（広報活動の見直し）なのか、開催内容のマンネリ化なのか原因を考えてみる必要があると思います。



当会の炊き出しは、他団体の炊き出しと比較すると、ホームレスの方とスタッフの距離が近いのが特徴です。また、夜回りでは行えない十分な時間を使用して野宿者との意見交換ができることから、ホームレスの方の目線にたったニーズを集めることが可能です。現状では、ニーズに答えることのできる範囲は限られてしまうかと思いますが、できる限りニーズに沿った炊き出しを行うことを前提に進めたらよいのではないかと考えます。ホームレスの方との対話ができるという強みを生かし、より労福会らしい炊き出しが行える方法を探っていきたいです。また、1999年発足当時を振り返ることや、発足から現在まで行った約15年の事業のデータをまとめ、どのように移り変わっているのかを確認し、今後の活動の指針にすることが必要だと思えます。

関本幸一

生活保護同伴活動

労福会では2014年度（2014年3月～2015年2月）に8名の方の生活保護申請に同伴しました。路上生活状態の人が6名、部屋のある人が2名であり、20代、30代、40代がそれぞれ1名ずつ、50代が3名、60代が2名でした。野宿歴は4年のCさんを除くとすべて半年以内で、比較的日の浅い人が多いことが分かります。早期発見早期対応が脱路上のポイントになっているのかもしれませんが。週1ペースで行っている夜回りが相談のきっかけとして一番多く、毎週の地道な活動が支援に繋がっていると言えます。

生活保護申請同伴活動（2月末日現在）

	状況と年齢	野宿歴	月	同伴／相談のきっかけ	申請（相談結果）	同伴者
A	路上（21男）	1ヶ月	4月	友人の紹介？	施設入所→居宅	井上、柏谷
B	居宅（32男）	—	5月	本人からメール	不明	小川、松原
C	路上（60男）	4年	6月	夜回り	居宅	井上
D	路上（22男）	1ヶ月	8月	本人からメール	失踪	小川
E	路上（54男）	1日	10月	本人から電話	居宅	小川
F	路上（56男）	6か月	11月	夜回り	居宅	小川、平岩
G	路上（43男）	2週間	11月	夜回り	居宅	小山田、楠
H	路上（55男）	2週間	12月	夜回り	居宅	井上
I	居宅（62女）	—	1月	夜回り	申請取下げ	波田地
J	路上（67男）	1ヶ月	1月	夜回り	居宅	上田、小山田

本来生活保護制度は国が生存権を保障するためにあるのですが、その利用には心理的な負担を感じる人が多いのも事実です。同伴記録票によればおそらくCさんもその一人だったと思われます。「自業自得であるから、このような境遇にあるのは仕方ない」といった発言はCさんに限らずしばしば私たちが耳にするものでした。今回は就労とセットで（収入の足りない分を生保で補てんするかたちで）申請するということになり、粘り強い接触を続けた結果が脱路上に結び付いたといえます。

一方、この申請同伴活動は相談者の置かれている状況が良く見えないまま対応してしまうこともあります。特に労福会の携帯に連絡が入って相談があった場合、まずは話を聞くことから始めますが、例えばDさんの場合は刑務所から出所したその日に連絡があり（法テラスの紹介らしい）、生保申請となりました。同伴記録によれば、その後本人の知人が迎えに来てくれたのですが、そこで交わされていた会話が明らかに「堅気ではない」と思われ、「下手に関わるのは危険である」という印象を持ったといえます。

もちろん実際にDさんがどのような人物であるかは一日だけでは測りかねるのですが、私たちがあらためて自覚しなければならないことは、労福会の活動には不特定多数の人がかかわるわけで、そこに何らかのリスクが発生しうることを想定しなければならないことでしょう。例えば電話などによる新規の相談があった場合は、必ず複数で対応するといったことを考える必要があるかもしれません。

代表 山内太郎

フォローアップ

1. これまでの総括

脱路上が活動のゴールではないという認識は、ほとんどの会員間で共有されていることと思う。しかし、具体的にどこがゴールなのか、そのために何をすればよいのかについては、会として決まった方針があるわけではなく、会員個人の裁量に任されていた。

昨年度はそれが問題視され、会が主導してフォローアップを行おうという意識の下、人手不足という問題もあって、個人訪問という形ではなく、炊き出しやイベントを開いて当事者に来てもらうという形でフォローアップを行うことにした。

その内容は以下の通り。

- ・2013年12月23日 合同食事会（参加者3名 うち2名は途中帰宅）
- ・2014年3月16日 美術館巡り（参加者1名）
- ・2014年5月25日 お花見（参加者0名）
- ・毎月第3日曜 サイババの炊き出し

だが、思うような成果（手応え）は得られなかった。参加者の人数を見ても、お分かりになると思う。このことは会議でも話題になり、2014年12月27日の運営会議でこれまでのフォローアップの総括を行った。得られた結論は以下の通り。

1. そもそも当事者とのつながりが希薄、量的にも少ない
2. 当事者の意見を聞かず、独りよがりなイベントになっていた
3. 責任主体が不明で、会員任せになっていた
4. 炊き出しに来ないような人のほうが問題
5. 活動目的や意義があいまい。言語化する必要

2. 総括を踏まえた展望

同会議では、上記の総括を踏まえ、今後のフォローアップの在り方が議論された。

まず、活動の目的については、経済的自立（借金がないなど）と精神的自立（人間関係のつながりがあるなど）を当面の目的（ゴール）とすることが確認された。また、経済的自立はともかく、精神的自立については客観的な指標が存在しないため、会議で話し合っただけで決めること、即ち、会が主導してフォローアップを行うことが改めて強調された。そのためのツールとして提案されたのが、フォローアップ表である。最後に会った日や担当者を記入しておき、フォローアップの状況をきちんと把握できるようにするために作成された。

また、対象者としては、他団体につなげた者も含めて広く対応していくこととなった。

次に、フォローアップの方法であるが、会議では決まらなかった。これは炊き出しにあり方等ともかかわってくるが、現状では個別訪問が軸になっているし、今後もそのようにフォローアップが実施されていくと思われる。

というのは、札幌市内で行われている炊き出しの在り方が変容しつつあるからである。現在、労福会が認知している炊き出し実施団体は、ハンドインハンド、北一条教会、サイババの3団体である。一時期、個別訪問によるフォローアップは大変なもので、この3団体の炊き出しに労福会がコミットし、そこでフォローアップ活動を行おうということになり、実際にサイババの炊き出しに参加したこと

があった（この試みは、会が主導して行わなかったため、失敗した）。しかし、いずれの団体も、炊き出しの対象を野宿者のみとするようになり、現在は生活保護受給者が参加できなくなっている。他団体の炊き出しでフォローアップを行うことはできなくなっているため、しばらくは個別訪問が中心となるだろう。

フォローアップの方針や方法等は、現在作成中の『労福会 活動の指針』にまとめられる予定である。

フォローアップ記録（2015年2月末）

	年齢・性別	月日	目的	場所	訪問者
A	74・男	3・29	安否確認	本人宅	井上
		8・23	安否確認	本人宅	井上
B	59・男	8・23	安否確認	本人宅	井上
C	61・男	9・16	債務整理に関する 相談	本人宅	井上
		10・13	安否確認	本人宅	井上
D	37・男	11・7	法律相談	エルプラザ	山内
E	52・女	11・26	転居に関する相談	喫茶店	小川
		2・18	転居に関する相談	喫茶店	小川
F	55・男	1・24	安否確認	本人宅	井上
G	41・男	2・9	安否確認	本人宅	井上
H	46・男	3・13	延命	本人宅	波田地・小川

事務局次長 上田文和

概数調査

<夏>

今年も 2014 年 8 月 31 日（日）にいつものように早朝 3 時から行いました。

調査は札幌駅からススキノ・中島公園までの範囲の市街地エリアとそれ以外の郊外エリアの 2 つに大別して行われるのですが、ここ数回の調査では参加できる調査員数の関係もあって、特に市街地エリアが手薄になっていたのではないかと反省がありました。

そこでこれまで一斉に札幌市内全域に散らばって調査していた手法を見直し、A.M.3:00 ~ A.M.6:00 を一次調査として市街地を全員で手分けして回り、A.M.6:30 ~ A.M.8:00 を二次調査として郊外エリア（主に駅舎、バスセンターなど）に散っていくという方法を採用することにしました。このことによって市街地で回りきれなかった地域もくまなく確認できカウント漏れを防ぐことができたのではと思います。

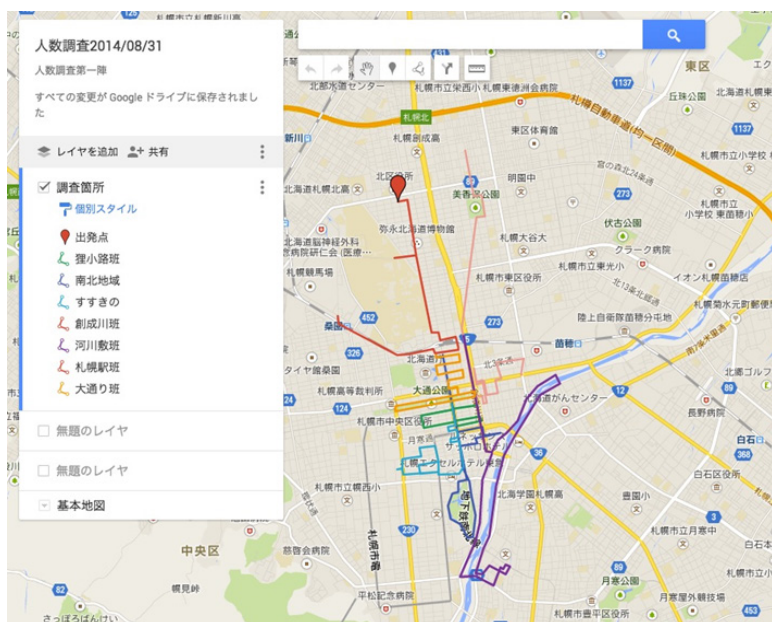
課題もありました。一つは二次調査への開始時間の問題です。朝 6 時半だとすでにたくさんの人が駅舎を利用しており確認が難しかったということです。郊外で確認できたのはこれまでで一番少ない 1 名のみでした。結局人手不足の問題に戻ってしまうのですが、もっと早い時間帯に調査を行うべきでした。

もう一つは調査を行う日程の問題です。当日は北海道マラソンの開催日と重なってしまい、スタート地点である大通公園は会場設営のスタッフたちですでに午前 4 時には賑わっていました。これでは寝られないと別の場所に移っていた人も多かったのではないかと思います。次回は北海道マラソンの日程を確認してから調査日を決めるようにしなければなりません。（来年度への備忘録として）。

今回は試みとして調査した箇所を以下のリンク先の地図にプロットしました。

今後も続けるかは、総会で議題にあがれば本望です。

https://www.google.com/maps/d/edit?mid=znutWBssllnU.kOd93425E_jU



<冬>

2015年1月18日に毎年恒例の冬の人数調査を行いました。今年も例年通り札幌市からの業務委託を受けたため札幌市役所（集合場所）を起点とし、A.M.3:30よりスタートして市内全域を調査して回った次第です。当日は風がごうごうと吹きすさぶあいにくの天気で、路上生活者の数は普段より大きく減少するのではないかと懸念されたものの、一定の傾向にそった調査結果となりました。と、ここまではいつもの通りですが今回の人数調査でこれまでとは違う点が2つありました。

1：コース

今年度は夏の人数調査でも行ったように、これまでに調査を行っていた範囲を見直し、より網羅的にカウントして回ることを心がけました。

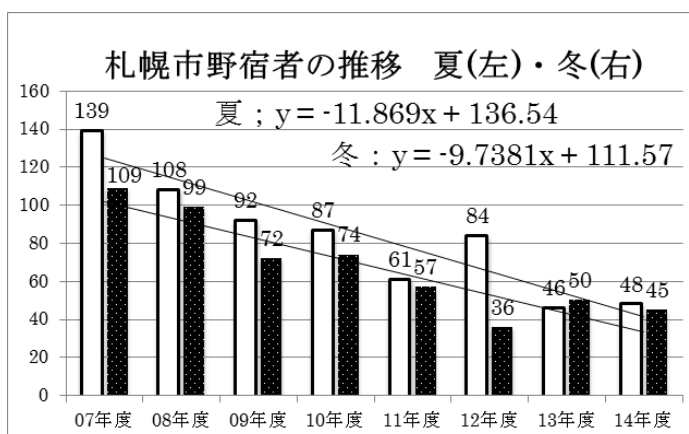
これまで1班に任せていた区画を二つに割り、網の目の細かい行路を組んだのです。しかし一方でこれにより必要な人員が増えてしまうという問題が生じました。これについては後述します。

以上のコース変更に加え、これまでの反省から駅のシャッターが開く時間帯にもカウントができるように、校外の主要な駅を回るグループはA.M.4:30からのスタートにしました。更にこれまで路上生活者の確認が1回も見られなかった場所は削り、代わりに24時間営業のスーパー、TUTAYA等の暖を取れる場所を追加しました。

諸々の試行錯誤の結果、人数は去年から減少という結果になりました。それに加え郊外では数が減少し、都市部に人数が集中しました。これらの結果が意味するところとして、路上生活者の数え漏れは調査結果の有意性を損なう数あるわけではないということです。ましてや札幌のような寒冷地では寒さをしのげるポイントは局在化することからも、これまでの結果の有意性が確かめられたといっても過言ではないでしょう。

2：参加人数

今回の人数調査がこれまでの調査と大きく違う点は、調査参加者がとても多くなったことです。Facebook、友の伝等々がうまく機能し、42名ほども集まりました。これによりコース変更も当初の予定通り行うことができ、効果的な人数調査が可能となったのです。また、そのほとんどが初参加者であることからうまくホームレスを取り巻く問題と取り組みについて意識化することができたように思います。参加者だけでなく調査以降も波及効果から問い合わせがあり、人数調査が本来の目的に加えて労福会にプラスに働いていることは喜ばしいことでした。



「傾向・分析・課題」

2012年度の調査では試験的に時間を1時間早めたところ夏・冬の人数が大幅に変動しましたが、おそらく例年通りの操作方法であれば2012年度の冬の目視数は54名程度であったのではないかと想像するには難しくありません。当時の考察として、ともに数え漏れがあったことをあげていましたが、傾向を見る範囲では数え漏れが一定の割合で存在するよう見られます。逆にいえば如何にして数え漏れされている路上生活者を減らし、真の値を得るかは今後も依然として課題となっています。

細かな分析として2012年度を除けば、夏・冬ともに厳密な意味での単純な減少傾向にあることが半ば事実として考察されます。そしてこれらの減少率はある程度一定の割合に近似されとも言えます。グラフにも示したように、毎年10名程度の減少ですが、その10名の行方については改めて考えてみるべきでしょう。

そしてなにより散々言われてきたことですが、ネットカフェ難民の存在は見過ごせません。調査中にもやつれた服を着た男性が漫画喫茶に入っていくのが見られました。今後もネットカフェ、漫画喫茶で暮らすホームレスについては調査方法を考慮する必要を感じます。

小山田伸明

支援者相談

「支援者相談」というシステムは、今年度の初頭に覚束なげにスタートした。発足するに至った理由は、支援にまつわる様々なトラブルを会として対応する体制を早急に整えねばならないという必要性に要請されてのことだった。それは、活動の必然ともいえるトラブルに巻き込まれた個人に対して、会が何の責任も負わずに、問題を放置するという事態を避ける

労福会は、人が人と出会うことを活動としている。人と人が出会う以上は、様々な行き違いや軋轢が生まれる。こうしたキズは誰でも日常的に生まれ、時とともに癒えていくが、中には一生の支障をもたらすものもある。

とりわけ労福会の活動では、多少の差はあれ、こうした摩擦に身を置かずにいられない。(この会が出会う対象は、その意味で「満身創痍」状態である。そもそも労福会の会員となるひとは、そのようなキズを敏感に感知する繊毛を、心にピッシリと生やした人々なのだろうと思う)。深刻な精神障害や、重大犯罪によって刑事罰を受けて最近出所したというひととも、ごく「フツウ」に出会う。距離の取り方は、各人に任されている。

冒頭で、支援者相談体制を早急につくらねばならない状況にあったと述べた。具体的な話を挙げるなら、路上生活者が会員に対してストーカー的な行為をとってしまうという事例は何度と報告されていた。トラブルに巻き込まれた当の本人にとっては、事は単に「会の活動を辞める」というだけでは終わらない。その後の人生は大いに左右される。同じ町に相手がいるとすれば、引っ越しも検討せねばならない(その引っ越し費用は本人の負担となってしまう)。最悪のケースは、命に係わる事件に発展することだろう。

もっと踏み込めば、トラブルに対する会の態度が、さらなる「傷つき」を生む場合もある。会の責任問題としていえば、こちらのほうがより深刻だろう。たとえばストーカー行為を相談した人に対して、「モテるんだね」と笑って取り合わないという態度は、決してそのつもりがなくとも、当人を多いに傷つけ、絶望させるだろう。

誰かがトラブルに巻き込まれたとき、会としてはどのような対応が可能になるだろうか。会員の一人としてあなたが相談を受けたとき、どんな言葉を返せるだろうか。

最後に、この制度について、なぜ私が担当なのかというと、必要性があるにも関わらず、特にやろうという人がいなかったためである。重要なのは、体制のなかに「会として問題を解決する」という器官を組み込むことではないだろうか。そしてこのような器官は本来、属人的な条件に影響されてはならないと思う。会員間の私的なつながりによるサポート(「〇〇さんなら信頼できるから相談しよう」)で解決できるのであれば、そもそもこんなシステムは全く必要ない。問題は、その〇〇さんが全ての人にとっていつでもいるわけではないということだ。「そんなに悩んでいたなら、言ってくれば良かったのに」と言って終わらせてもよいが、同じトラブルは何度も繰り返し生まれるだけであろう。

支援者相談窓口は、以下を目的として設立された。

- 一、 問題を個人のレベルから、会のレベルへと引き上げること。
- 二、 これまで生じたトラブルについてまとめ、予防策について会全体で考えること。

活動の履歴

① ハラスメント対策に関するドキュメント作成

4月に労福会でこれまで生じたトラブルについてまとめた書類を作成した。このドキュメントは初めての人用の新人パックの中に入っている。

② 事例検討会&ロールプレイ

現在も進行中のケースを取り上げて、5月中旬に勉強会を開いた。焦点は、会の活動によって、重篤な知的・精神障害を持つひと、重大な犯罪歴を持つひとと出会うことは稀ではなく、このような人々に対してどのように接していくべきか、という点であった。

「そもそも労福会のキャパシティを超えているケースを、安易に引き受けるべきではない」という意見もあった。専門性を持った連携先をストックし、繋げられる状態にしておくべきだろう。

ロールプレイについては、やることは適当でないと判断した。というのは、こうしたトラブルとなる事例を演習することは、「ホームレスとはこのような人である」という先入観を前提とせねばならない。まして入って間もないひとの前でそのような先入観を再現することは、決して良いことではないと思う。

③ 司法書士会「菜の花ゼミ」での発表

菜の花ゼミとは、札幌の司法書士の中でも女性を中心としたゼミである。10名ほどが楠さん、波田地で、労福会の活動の概要とともに、「支援にまつわるトラブル」について発表をした。

今後の展望

- ・進行中のケースへの対応を中心に、過去のケースに関する事例検討会を、前半期に一度開く。
- ・精神保健や更生支援の専門家を招聘した、質問会や勉強会の開催。(候補未定)

波田地利子

来年度へむけて

来年度指針

・体系化 / マニュアル作成・活動記録や調査結果の整理・概念や現在の支援の見直し

・学習会を開く

来年度のテーマは体系化である。

労福会には、支援や事務局の運営について包括的にまとめたマニュアルがない。

支援における概念や認識を整理し、支援方法や札幌の路上生活者の実態等を体系的にまとめ、安定した継続的支援のため労福会の骨組みを確たるものにした。

体系化のために不可欠であるのが、振り返りと再構築である。今に至るまでの労福会の軌跡は、資料と会報の山に埋もれている状況であった。これまでの調査結果や活動の記録は路上生活者の推移を辿る有益な情報であり、先代の会員の思想や経験は今の支援を形作っているパーツの一つ一つである。改めて発掘し整理し直すことで、過去の労福会をより意味のある形に再構築したい。それは即ち現在の労福会を見直すことでもある。さらに、労福会の軌跡は、未来への指針になり得る。今までの反省とこれからの期待も加え、包括的なマニュアル作りに反映されるべきである。

また、体系化に伴って労福会の蓄積を共有する学習会を開きたい。支援経験や年齢の多様な会員たち間で議論を交わし、各個人の知識を補い高め合うことは、骨組みを得た労福会の密度を高めることになるだろう。

さらに、これらの活動の成果は可能な範囲で外部に公開していきたい。というのもこれまでの労福会の活動は、当事者との一対一の関係という側面が大きかったと思う。そこに関連する貧困団体との連携や非貧困系団体とのかかわり、そしてこれまで蚊帳の外にいた市民たちともつながる手段となれば、路上に漂う閉塞感を打破できる可能性がある。特に路上生活者の実態は多くの人にとって知りえない事柄であり、「路上生活」から疎い人にこそ価値の高いものであるとおもう。

池百代

2014 年度決算報告

別紙参照

予算案（収入）

費目	14年度決算額	予算額	摘要・内訳
会費	143,000	140,000	個人会員
			学生会員
助成金	250,000	100,000	損保ジャパン
事業収入	433,240	420,000	北星学園
			札幌市
寄付金	241,200	150,000	北一条教会
			個人
雑収入	4,236	0	
小計	1,071,676	810,000	
前年度繰越金	1,528,763	1,823,402	
総計	2,600,439	2,633,402	

予算案（支出）

費目	14年度決算額	予算額	摘要・内訳	
活動費	492,710	620,000	夜回り	100,000
			炊き出し	150,000
			同伴・フォローアップ	50,000
			人数調査	250,000
			意見交換会	70,000
研修費	3,024	50,000	研修会参加補助	30,000
			書籍代	20,000
広報費	12,860	36,000	会報発行費	30,000
			ホームページ管理費	6,000

費目	14年度決算額	予算額	摘要・内訳	
運営管 理費	259,467	211,000	事務所家賃・維持費	60,000
			事務局員活動費補助	25,000
			事務消耗品費	30,000
			通信費	80,000
			交通費	10,000
			ボランティア保険	6,000
			雑費	
組織対 策費	-	20,000	新歓イベント	20,000
小計	768,061	937,000		
繰越金	1,823,402	1,696,402		
総計	2,591,463	2,633,402		

反貧困ネットワークへの加盟について

他団体との連携を深め、また個別具体的な支援を越えて、社会問題としての貧困問題に関わるため、反貧困ネットワークへの加盟が運営会議にて提案された。

会計年度の変更について

会計年度を現在の2月から12月に変更するという提案について。会計の締め日から総会までの期間が短すぎるため、無理があるのではないかという指摘であった。よって、以下の通りに改正することを提案する。

規約第12条2項

旧：本会の会計年度は、毎年三月一日に始まり、翌年二月末日をもって終わる。

↓

新：本会の会計年度は、毎年一月一日に始まり、翌年十二月末日をもって終わる。

2015年度活動計画案

- 4月ごろ 新歓
- 5月30日 炊き出し（独自）
- 8月29日 夏季人数調査（独自）
- 10月3日 会報32号発行
- 10月ごろ 炊き出し（共催：司法書士会）
- 1月16日 冬人数調査（委託）
- 2月ごろ 炊き出し（共催：司法書士会）
- 2月27日 会報33号発行
- 3月26日 2015年度総会

（小山田伸明）

役員体制

別紙参照

私と労福会

大家佳子

労福会の活動に関わるようになってから1年と9か月程になります。夜回りに行ったり行かなかったりとマイペースに活動しておりますが、最近は顔見知りの方も増えて、「お、前に見た顔だな」と声をかけられるようになりました。

活動に参加し始めたばかりの頃は、いままでの人生で関わる機会がなかった路上生活者に対して、恥ずかしながら、どこか「自分と違う世界の人」という異質性や多少の偏見を感じていたように思います。夜回りに行っても当事者と何を話したらよいのかわからず、恐る恐る支援物資を渡して、ささっと次の場所に行く、などということもありました。しかし、活動を重ねる中で次第にじっくりと会話する余裕も出てきて、当事者一人一人が歩んできた人生模様を聴いて驚き、感動し、時にはアドバイスを受けることも。夜回りに楽しさを見出し、活動を続けてきてよかったとしみじみ感じております。

当事者が路上生活に至る経緯はそれぞれ異なります。当事者の中には高齢の方や、障がいのある方、または何らかの障がいがあるのではと推測される方など、福祉の対象となる方が多いように思います。当事者を「路上生活者」とひとくくりで捉えてしまうのではなく、それぞれに異なった状況や生活歴があることを踏まえて、本人が必要とする支援内容を考えていくことの大切さを感じています。また、福祉専門職を目指す者として当事者の支援を考えたときに、福祉の力で何ができるのか、また現在の福祉には何が足りないのかを考えて、問題意識を感じながら支援に関わっていければと考えております。

来年度は、もし機会があれば生活保護申請の同伴など、夜回りにとどまらない幅広い活動に関われたらと思っています。来年度もよろしくお願いいたします。

小川遼

大半の市民団体がだらしのないのは、給料が払われないからだろう。だいたい市民団体というのは、クビという最終的暴力を不在のままに会社みたいな官僚制を取り入れて、それだけで満足しているのだ。計画された事業がいつのまにか放り出されたり、役員が決められた仕事をしないままでいたりするのは、単にその人の怠惰に由来するのではない。そういった秩序を維持するには力が必要なのである。それを見落としている。

労福会は15年も続いた。いろんな市民団体が偶然に盛り上がっては、偶然に消えてゆくのを横目に。きっと、バランス感覚の鋭い人に恵まれていたのだろう。僕はそう思う。食事に誘い、交流の場を作り、怒る人はなだめ、へこんだ人は励ます。それは規約にも定められず、ほとんどの会員は存在すら知らない活動だ。けれど、これによって組織は体制を維持できる。親密なコミュニティの複雑さが、クビに代わる力を生み出すのだ。

僕はそれを制度として認知させたかった。特別の才能のある人が偶然現れることに頼るのではなく、組織が自己組織化していくように。それは、あらゆる市民団体にとって、偶然消えてしまわないためには必ず必要な施策だろう。けれど僕の提案は、民主的でないという理由で受け入れられなかった。まあ、いい。しかたない。僕の話は小難しいと評判で、つまり民主主義とは、そういうことだからだ。

ごもつとも。

とはいえ、何もできなかったわけではないようだ。近頃の労福会には、少し前とも違って、フラットで自生的な雰囲気が出てきたように思う。僕の願望かもしれないけれど。もう今後はうるさいことは言わず、後進に道を譲りたい。彼らには彼らで、やりたいこともあるだろうから。

最後にひとつ。労福携帯を持つのを嫌がっている人がおおいけれど、あれは案外楽しい。僕は携帯を二年弱もっていた。電話をかけてくるのは、夜回りで会う顔の知れた人たちであることは、ほとんどない。意味不明な人や、報告書には書きようのない人、なんだか知らないけどとにかく困っている人などだ。適当に流したり、会いに行ったり、結果としてすごく深い付き合いになることもある。夜な夜な寂しくなるとかけてくる名の知れない人もいる。たぶん、労福会の活動の中でも最もディープな領域なのだ。ああ、人間！ってなる。オススメの仕事だ。

小山田伸明

総会の資料を読み返すと、今の学生と同じように精神をすり減らしながら当事者に関わってきた足跡がみられます。むしろ先輩方と同じ轍の上を僕らは歩いているのでしょうか。

そう考えるとろうふく会批判も現実味を帯びてくるのかもしれませんが。学生や社会人が自らの意志だけで参加し、対価もなくただ悩みながら路上生活者に声をかけて回る日々。抱えている思いは様々にしろ、誰一人としてため息を吐かなかった者はいなかったのではないのでしょうか。そうして散々歩き回って、つまり同じ道を堂々巡りしたその後で、ある人は会社に勤め、ある人は支援団体を立ち上げ、ある人は命を絶ってしまうというろうふく会のあり方。そして気がつけば、ろうふく会は今日もさして変わらず会員をして悩ませ、社会に漂う貧困の渦に呑まれる一歩手前を漕いでいます。

自分はろうふく会の活動自体に懐疑的です。経験豊富でノウハウをもった人間が信念をもってやるならまだしも、経験もないただ若いだけの学生がこういった環境に身を置くことは、本人にも組織にも有害なのではないかと思うからです。

学生にしてみれば世界を見聞して回るなり、自分のキャリアアップのために人脈作りや研鑽に励むなり、型にハマった賢く明るい選択肢がらだろろうと思えてなりません。そしてそんな風に自己を大事にすることが本分であり、この先の競争社会で生き抜く糧にも成り得るとも思うのです。組織にしてみても、学生より社会の方が運営基盤を固くできるという意見に、非の打ち所がないように感じます。当事者の支援にしても正確で頼りになる支援をできるでしょう。

さらに会の意義について考えると、現状の会はまさしく支援団体であり賛否はともあれ人を思う人道的な活動として意義深く絶やしてはならないものであると思います。会の活動もそれに注力するだけで十分存在意義は確立され得るとも思います。しかしそうなると、それはやはり学生には重いのです。ことさら学生としての自分には重いのです。加えて上述の理由から学生には不向きな活動とも感じています。

しかしそこで思い出すのは「椎名ゼミ」としてのろうふく会でした。当初のろうふく会のあり方、学生の教育の場であり調査を主とする運動であったというあり方です。当時は学生にとって成長の場であり、貧困と労働について実態に即したマインドを培う場でもあったのだと聞きます。そして僕もまた、学生と市民と社会自体へ対して、学校でも社会でも見過ごされる「社会そのものの質」について問を投げかける場であると感じています。

だから学生が自由にやれというわけではありません。直面している問題は、人の生き死にと、競争とお金のことですから。

「こんな活動して、あんたらはちゃんと面倒をみれるのかって聞いてるんです。若けりゃいいってもんじゃないだろうが！」

昔同伴の際に出先で言われた言葉ですが、嫌になるくらいその通りだと思います。力不足と浅はかきで誰かの人生を台無しにする可能性だってあるでしょう。

それでも僕は救いたいと思いますしそれを無駄だとは思えないのです。

ろうふく会員としての僕にできるのは個人の意思を尊重することだけです。当事者が路上にいたいならそれを否定はしないし、生活保護を受けたいなら手伝います。そして結局居宅での生活に耐えきれなくなってまた路上に出てくることも、生活保護を切ったものの仕事を1日でやめてまた途方にくれるのも僕は肯定します。ろうふく会も特別そういった当事者を否定するスタンスではないと思っています。まして本人の意思に反して無理強い“文化的な生活”を営ませることや、こまめに気をかけて手取り足取り世話を焼くことは僕には出来ません。だらしのない彼らを更生させようと骨を折る気概も僕にはありません。

だけれども、自分の身を守るだけでは自分の身一つ守きれないこの世の中、僕は自分のために誰かを助けようと思うのかもしれないかもしれません。労働組合的思想ともとれます。一方で自分の考え方について、社会を味方につけようともがく甘い考え方だとも思います。個人の不満を社会問題に転換することで自分を正当化している、と。社会はすでに「成立可能な構造」の中で大多数にとって功利主義的に十分機能しているのにも関わらずです…。

そんなことを考えていると、ホームレスに関わる活動の意味と近代社会とは決して相容れないもののようにも思えてきます。しかしそう思いながらも僕は次年度の事務局次長としてこの活動を支えます。それは自らを成長させるためであり、目の前で困っている人を可能な範囲で助けたいからです。そしてその上でこの社会の現状と問題と軋轢と諸々の弱点、それらを可能な限り探り出し、理解し、広めてみたいからです。社会は変革するその日のために、さながらエンレイソウのように日の目を見ない土の中でも鼓動し続ける魂が必要だと信じるからです。

長くなりましたがそんなわけでどうか会員の皆様、至らない事務局員ではありますが一年間お力添えをお願いいたします。特に社会人の方には同伴にしても会計にしても、多大な協力をいただいています。それこそが今の「北海道の労働と福祉を考える会」を成り立たせているものと僕は思います。貴重な時間を割いてでも参加してくださることに心より感謝しております。そしてまた葛藤しながらも事務局長を引き受けてくれた上田くん、どうか一年間“ともに”に頑張りましょう。

上田文和

来年度は労福会にとっても、私にとっても試練の年となるだろう。

まず、労福会は変わらなければならないと思う。一つには、会員個人の努力に依存した活動形態を、もう一つには、資料や記録等が管理されず、継承されていかない運営を変える必要がある。そのためには、活動の大まかな指針やマニュアルの存在、そして、それらを含む様々な資料を管理・継承していくシステムを構築していかなければならない。これらの改革を通して目指す団体は、「会員が、当事者のことを中心的に考えて活動できる団体」である。

これまでの労福会の活動においては、生活保護の同伴やフォローアップの目的・指針などが確立・継承されていなかった。そのため、会員は手探りで活動せざるを得ず、非常に苦しい思いをしてきた。もちろん、活動のなかで試行錯誤し、悩むことはあると思う。それは、支援活動には避けて通れないものだと思うし、情報を共有しあって、会全体で乗り越えていくことができるものでもあるだろう。

う。しかし、これまでの労福会は、それ以前の問題、すなわち、「この場合はどこに相談できる」、「このような制度が使える」などの情報すら共有されてこなかった。そのため、活動に際し、会員はまず制度や法律などを自分で調べることから始めざるを得なかった。当事者のケースワークは二の次にして、そのような場所から始めることは、会員にとっては大きな負担であるし、当事者にとっても不幸なことであるだろう。この状況を変えるために、来年度は「労福会 活動の方針」を作成する予定である。これには、各種の活動の目的や指針。技術的な問題に関してはそのマニュアル、利用可能な諸制度や関係団体などの情報をまとめる予定である。これらを活用することで、「どのような制度があるか」ではなく「この人にはどのような支援策がふさわしいだろうか」を第一に考えることができるようになると思う。

また、これまでの労福会は多くの慣習・慣例によって活動してきた。2014年度はそれらの慣行を見直すことが多かった。これらは、組織を民主的に運営するため、何のために活動するのかを考えるために必要なことであったが、同時にかなりの負担でもあった。2015年度でこのような慣行による活動は終わりにし、合理的かつ民主的なシステムによって運営される組織体制と明確な目的を持った活動を実現していきたい。そして、会議等で話し合われるのは、専ら当事者に関すること、というような会になれば良いと思う。

上記のような改革を通し、私は、労福会から『学生らしさ』をなくしていきたいと思う。ここでかっこつきの“学生らしさ”と書いたのは、活動から一切の学生らしさをなくそうと思っているわけではないからだ。私がなくしたいと思っているのは、活動の無計画さや適当さを言い訳するために利用される『学生らしさ』である。私も、これまで、「学生だから」という理由で、労福会の活動をどこか適当で中途半端にしてしまっていた。もちろん、学生の本分は学ぶことにあり、私生活の全てを犠牲にすることはないし、してはいけないと思う。しかし、できることすらも、「学生だから」といってしなかったり、適当にしたりしてはいけないだろう。

私が入会した2013年度は下郷事務局長が、そして2014年度は小川事務局長が組織を変えていこうと奮闘された。その志を受け継ぎ、私も努力していきたい。

だが、私にとっては、非常に苦しい年であると思う。私が頼りにし、依存していた両事務局長はもういない。これからは、私が2人に代わって活動しなければいけない。労福会が変革期を迎えているこの重要な時期を、本当に乗り越えていけるのであろうか。不安はある。さらに、私には、労福会員として、致命的な欠陥がある。私は人が苦手なのである。2014年度は、小川事務局長が主に活動を取り仕切ってくれ、私は事務に徹していた。会員の皆は「事務をやっていて偉い」と言ってくれたが、皆も、そして私も分かっていることは、事務ができるのではなく、それ以外ができない、ということだ。私は人前で話すのが苦手だからメディア対応や講演ができないし、人と話すこと自体が苦手だから、同伴やフォローアップ活動も得意ではない。毎週の夜回りも、正直辛い。私のそのような欠陥にも関わらず、2014年度に事務局次長の職務を曲がりなりにも果たすことができたのは、事務局の皆のサポート、そして、何よりも小川事務局長があらゆる仕事をしてくれたからである。本当に感謝している。2015年度は、その小川事務局長はいない。これからは一人で頑張らなければならない。

2015年度は私にとって、まさに試練の年だ。資格試験の勉強をしなければならないし、生活費を稼ぐために働かなければならない。その他の団体でも、中心となって活動することが求められている。一人では到底乗り越えられないだろう。どうか、頼りない私を助けてほしい。